

# 「知的生産性の向上」を刺激する 「コミュニケーション」が

加藤 一紀 正会員 (株)大林組 技術本部技術研究所 構造技術研究部 主任  
西澤 彩 正会員 (株)大林組 技術本部技術研究所 生産技術研究部

近年、働き方改革が提唱され、土木の職場でも独自の生産性向上等に向けた取り組みが行われている。それぞれの働き方・取り組みを通じて、各職場の魅力を伝え、「土木の働き方」のヒントを探る本連載の第10回は、総合建設会社における技術研究所の職場環境について男女2名の視点から紹介する。

## 私たちの職場

大林組技術研究所は、技術研究所再整備計画に基づき、2008年より整備を進め、組織体制と研究施設を一新した。その変革内容の代表的なものとして、組織における「土建融合」と、2010年に「知的生産性向上」を指して竣工した研究施設があげられる。これらの変革が研究所の生産性向上や働き方などのような効果を及ぼしているのかについて、2014年に入

社した私たちの視点から感想を交えながら以下に紹介する。

技術研究所の本館は「テクノステーション」と呼ばれており、「知的生産性向上」の目玉として計画された研究施設である。建物は3階建てで、写真1に示すように2階と3階が吹き抜けのワルム型のワークスペースとなっており、研究所長をはじめ研究員全員が一堂に会している。これによりコミュニケーションを誘発し、専門分野の異なる研究員が互いに交流、刺激し合うことで、知的生産性の向上を図るとい



加藤 一紀氏  
KATO Ikki  
2014年早稲田大学大学院博士後期課程修了。2015年博士(工学)、入社。専門は地中構造物の耐震防災。

西澤 彩氏  
NISHIZAWA Aya  
2014年京都大学大学院博士前期課程修了。2014年修士(工学)、入社。専門はコンクリート材料。技術士(建設部門)。

うコンセプトである。また、技術研究所は、開発したさまざまな技術を自分たちで体現し実証する場でもある。このため、研究員の執務スペースや打ち合せスペース(写真2)には、コミュニケーションを図るための空間配置や、ストレスとならない最適な光・空調環境の実現など、さまざまな技術的工夫がなされており、年間4000人を超える方々に見学いただいている。

入社直後、テクノステーションのデスクに着席して最初に驚いたことは天井の高さと奥行きが広さであった。そして始業と同時に聞こえてくる200人近い職員のキーボードをたたく音と電話の声。静寂の中にある活動音に「二日が始まったぞ」という人のエネルギーを感じ、新たなスタートに胸が高鳴ったのを覚えている。実際にこの大空間で働いてみると、全職員が一堂に会しているテクノステーションの環境は業務効率を高めると感じる。個人的に定型的業務

## 組織改編 「土建融合」の効果は？

は短時間で片付け、創造的業務は多種多様な人の意見を取り入れながら進める方が理想的だと考えている。テクノステーションでは、自席で立ち上がり、研究員全員が見渡せ、事務部門や他の研究部までの動線に遮る壁はなく、気軽に相談に行ける。また実験施設の行き帰りや、共用部での印刷中に、異分野の研究員と軽い雑談を交わしたり、コーヒープレイクに誘い業務や研究の相談をしたりすることもできる。

知的生産性向上にはその住環境も欠かせない一つの要素である。例えば、光環境について、人は人工的な光よりも、日光の自然な明るさの環境の方が

リラクセスすることができる。テクノステーションは、天井から日光の反射光を取り入れ、壁面は全面ガラスからの採光と自動調整のルーバーで適度な明るさに調整される。そのため、手元の蛍光灯に頼らず落ち着いた気持ちで仕事に集中することができる。

一方、テクノステーションの住環境は初めから全ての面において優れていないわけではない。ワルム型のワークスペースは、大勢が一つの空間にいてことで空調に対して不満を感じることもあったからだ。しかし、こうした課題も測定した環境データに基づく環境制御によって改善され、今では快適な執務空間を実感している。

## 「コミュニケーション」が重要

テクノステーションの環境および研究員、それぞれの利点を有機的に活かしていくには、研究員相互のコミュニケーションが欠かせない。このため、研究員同士の交流を図る試みも積極的に行われている。研究開発では試行的

な研究開発テーマ(次世代テーマと呼んでいる)について、職種や専門分野を問わず若手研究員が集まって議論する場がある。実際にこの次世代テーマに参加することで、専門分野の全く異なる若手研究員と刺激し合い、新たなアイデアの創出や研究開発に役立つことを実感できる。また、8月には技術研究所のOB・OG、協力会社も参加するピアパーティーを開催しており、研究員が即席バンドを結成して演奏するなど、大いに盛り上がる。秋には全役員を対象に研究成果発表会を開催し、全社的人的・技術的交流の重要な機会の一つとしている。

社会が大きく変化し、先行きが不透明な時代にあつて、日常的に分野を越えたコミュニケーションがとれる環境は貴重であると感じている。環境は利用してこそ価値があると思う。自らもその環境の一部として価値を提供できるように引き続き日々の研鑽に励みたいと考えている。

### 参考文献

(1) 吉野、勘坂、木田、間瀬、和田、伊藤、建築空間が知的生産性に与える影響度の評価、大林組技術研究所報、No.74、2010年

(担当編集委員・山崎哲也)



写真1 ワークスペース



写真2 コミュニケーション促進の工夫